

集 落 と 道

石尾 政信

1. はじめに

旧乙訓群域には各時代の遺跡が多くあり、弥生時代以降の遺跡は高密度に分布している。ほとんどの遺跡が各時代の遺構が重複するいわゆる複合遺跡であり、さまざまな遺構・遺物が見つまっている。

これまで検出された道路遺構には、高田遺跡の弥生時代の道路状遺構^(注1)、奈良時代の神田古道^(注2)、平安時代の久我畷^(注3)、平安時代の西国街道^(注4)の例がある。奈良時代の神田古道はかつて足利健亮氏が乙訓群内を斜行する道路と想定した「古山陰道」推定ライン^(注5)から東方約1kmの位置にあり、ほぼ方位が同じであることが注目されている。しかし、関連性は明らかでない。

乙訓群内で、足利氏が提唱する「古山陰道」推定ライン上では道路状遺構が検出されていないこともあり、主要な遺跡の分布状況と住居跡・建物跡などの検出状況から交通手段としての「道」を考えてみたいと思う。古代においては水路・陸路が主要な交通手段であり、なかでも住居と住居、集落と集落を結ぶ陸路が一般に利用されたと考えられるからである。

2. 遺跡の状況

現在の行政区域ごとの主な遺跡の概観は以下のとおりである。

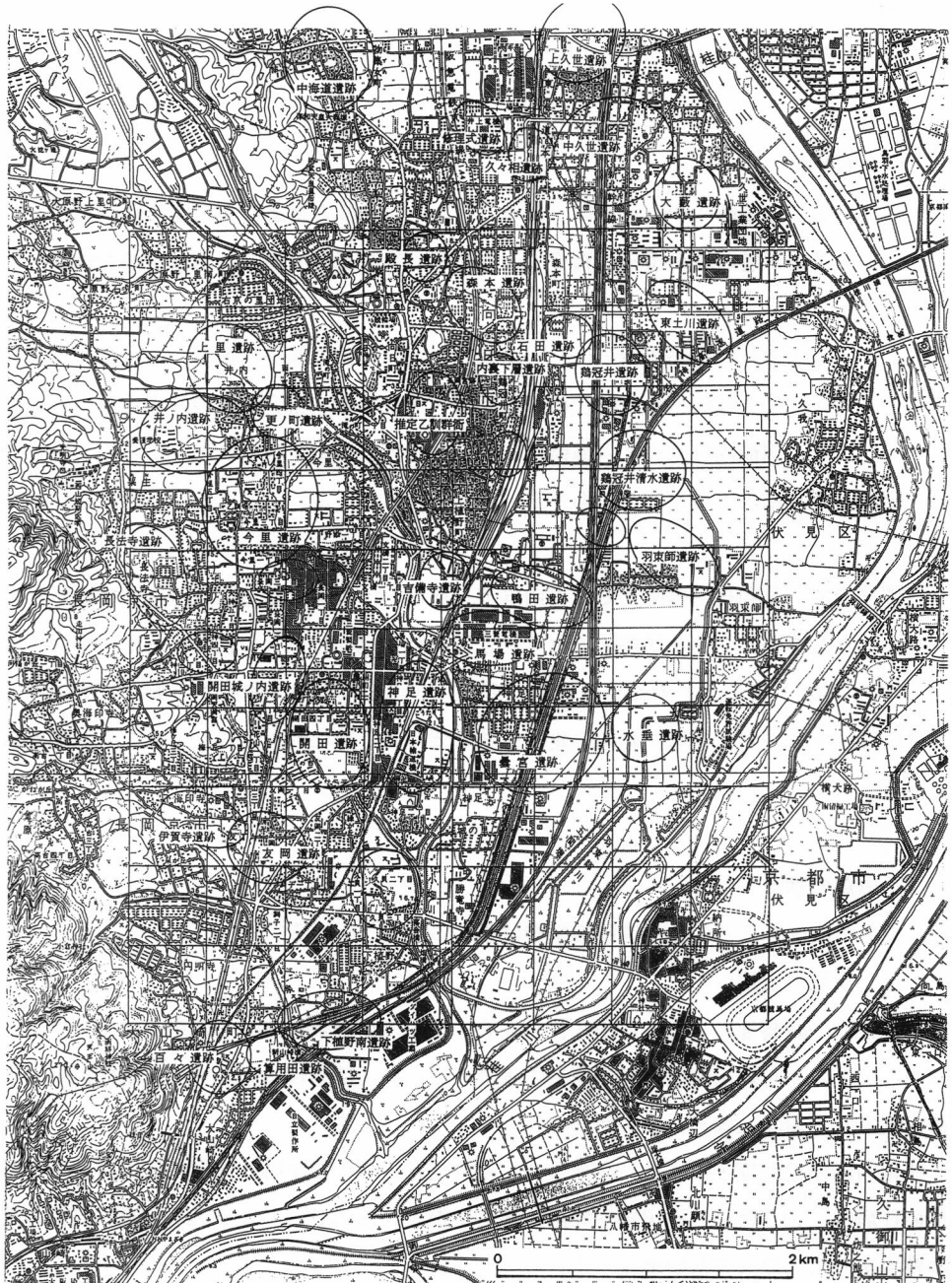
①京都市域の遺跡

桂川右岸の微高地に立地する中久世・大藪・東土川遺跡がある。この中では中久世遺跡が中心地と考えられ、弥生時代中期から集落が営まれ古墳時代～奈良・平安時代以降も集落が継続しており、ほとんど中断がみられない遺跡である。

桂川右岸の氾濫原・微高地に立地する羽束師遺跡では、弥生時代後期の住居跡、古墳時代の住居跡、奈良時代の水田跡や井戸・建物跡などが検出されている。平安時代以降の建物跡もありここでも集落が継続している。

桂川右岸の氾濫原に立地する水垂遺跡では、古墳時代前期以降の集落跡・同後期の水田

跡、飛鳥時代の水路が検出されているが、奈良時代の遺構は見つかっていない。長岡京期には条坊が整備され宅地で建物群が検出されているが、平安時代の建物跡は見られない。



第1図 主要遺跡分布図

②向日市域の遺跡

向日市北端の中海道遺跡は丘陵緩斜面・段丘面～扇状地に営まれている。弥生時代後期の住居跡が検出されており、それ以降古墳時代の住居跡、奈良・平安時代の建物跡も検出され、集落はほぼ中断することなく継続している。

J R向日町北方の微高地にあたる久々相遺跡では、奈良時代から平安時代の掘立柱建物跡群が検出され注目されている。集落跡というより官衙的要素が強いと言われている。

向日丘陵の東側段丘下位面を中心とした殿長遺跡では、古墳時代前期の住居跡が検出されている。南西部(辰巳遺跡)では、奈良時代の土坑・建物跡が検出されている。断続的に集落が営まれているようだ。

段丘下位面～氾濫原にあたる森本遺跡では、弥生時代前期の水路跡、同中期の住居跡や古墳時代後期の住居跡が検出されている。奈良時代の遺構はほとんど見つかっていない。南西部にあたる地域(御屋敷遺跡)では、平安時代の建物跡・井戸跡が検出されている。氾濫原にあたる地域では古墳時代以降に集落は営まれなかったと推測される。

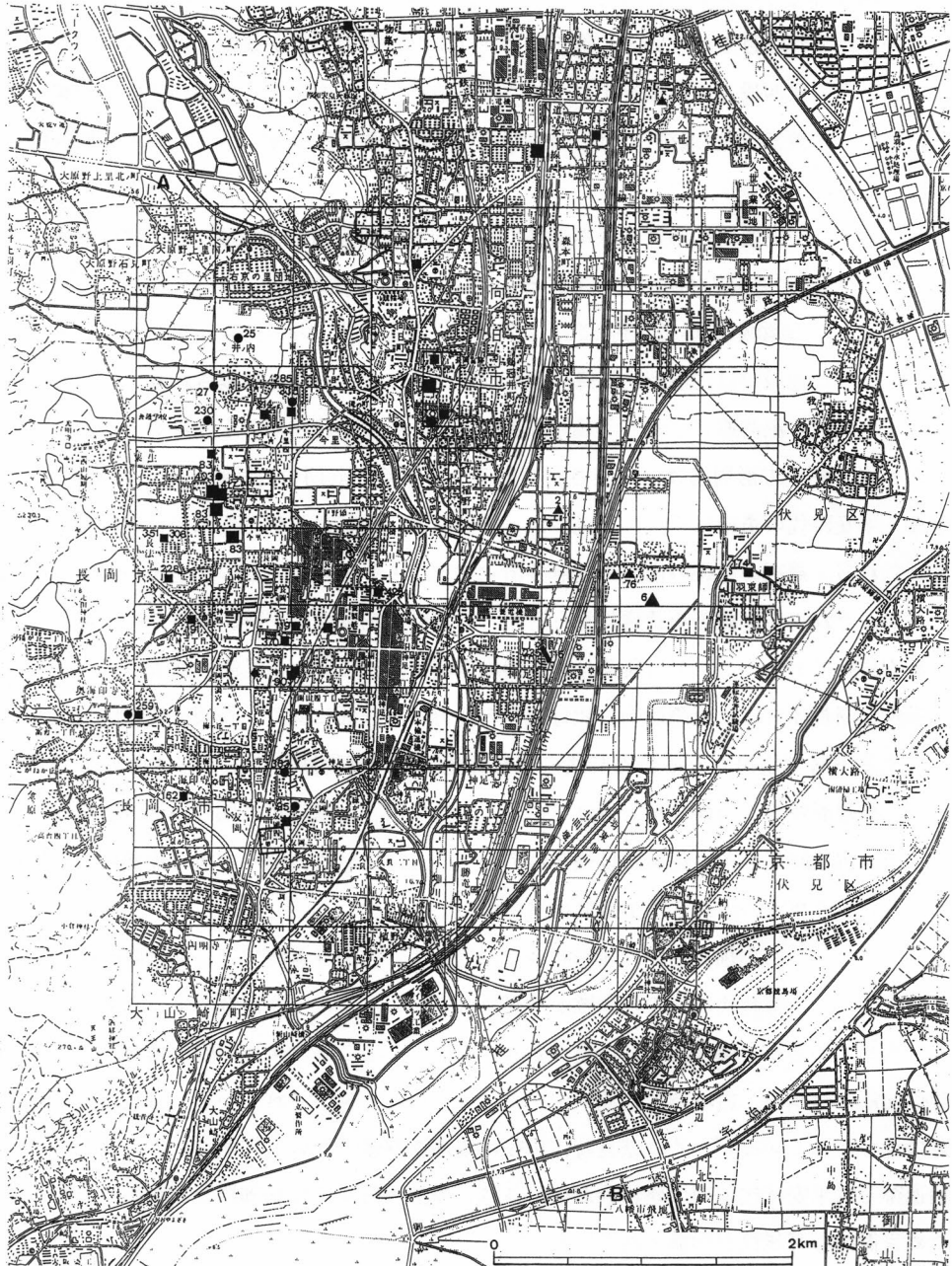
向日市東部の氾濫原に立地する鶏冠井遺跡では、弥生時代前期の水路跡などがあり、同中期の住居跡・方形周溝墓が検出されている。古墳時代前期の流路跡が知られる程度で、奈良・平安時代の遺構はほとんど見つかっておらず、集落は弥生時代以後に継続しないと推測される。鶏冠井遺跡の南方の鶏冠井清水遺跡でも弥生時代中期の住居跡が検出されているが、それ以後は顕著な遺構は見られず、古墳時代前期の水田跡、同後期の土坑が知られる程度である。ここでも集落は古墳時代以後に継続しないと推測される。

推定乙訓郡衙跡は、阪急西向日駅付近から北方の段丘面にあり、長岡宮朝堂院地域を中心とする下層で検出される奈良時代の掘立柱建物群は建物跡の方位から4時期に分類され、乙訓郡衙跡の有力候補地とされている。ここでは、古墳時代後期の山畑古墳群などがあるが、古墳時代以前の住居跡は知られていない。弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡は、それより東方の内裏下層遺跡で検出されている。

向日市南部の旧小畑川沿いの緩扇状地に立地する吉備寺遺跡では、弥生時代中期・後期の住居跡、古墳時代後期の建物跡が検出されている。また、瓦が散布するため吉備寺廃寺とされているが、建物跡などは見つかっていない。ここより東方の鴨田遺跡では、弥生時代前期の壺棺墓、古墳時代前期～中期の住居跡などが検出されている。奈良時代の建物跡は見つかっていないため、奈良時代以後は集落が継続しないと推測される。北方の中福知遺跡では平安時代前期の建物群が検出され、多量の軒瓦や緑釉陶器などが出土しているため官衙跡の可能性が指摘されている。

③長岡京市域の遺跡

京都市との境界の段丘面～氾濫原に立地する上里遺跡では、弥生時代前期の土坑・中期の溝などが検出されているが、弥生・古墳時代の住居跡は知られていない。段丘崖に沿った流路跡から古墳時代後期～飛鳥・奈良時代の遺物が見つかり、その中で「弟国」と墨書



第2図 奈良時代の遺跡(■建物跡、●その他)

された奈良時代の須恵器が注目されているものの、まだ飛鳥・奈良時代の建物跡は見つかっていない。

上里遺跡の南の段丘面～氾濫原に立地する井ノ内・今里遺跡は弥生時代後期～古墳時代にかけての乙訓地域屈指の集落跡で、多数の住居跡などが検出されている。段丘面では飛鳥・奈良時代の建物群が検出され、建物の方位から五期に分類されている。また、遺跡の範囲内に乙訓寺があり、講堂と推定される遺構や瓦窯が検出され、飛鳥時代後期・奈良時代などの軒瓦が出土している。遺跡の範囲内の移動が見られるが、集落が継続していることがわかる。

今里遺跡の北東方の更ノ町遺跡では、長岡京の造営にあたって埋め立てた自然流路の下層から奈良時代中頃の多量の遺物が出土し、「園宅」・「園司」の墨書土器や木簡などから周辺に宮内省の園池司に所属する「園」に関連する施設が奈良時代に存在した可能性が高い。石敷き排水施設をもつ井戸跡や建物跡も検出されている。また、西二坊大路の路面を横断する長岡京期の溝からは飛鳥時代後期の軒丸瓦が出土している。

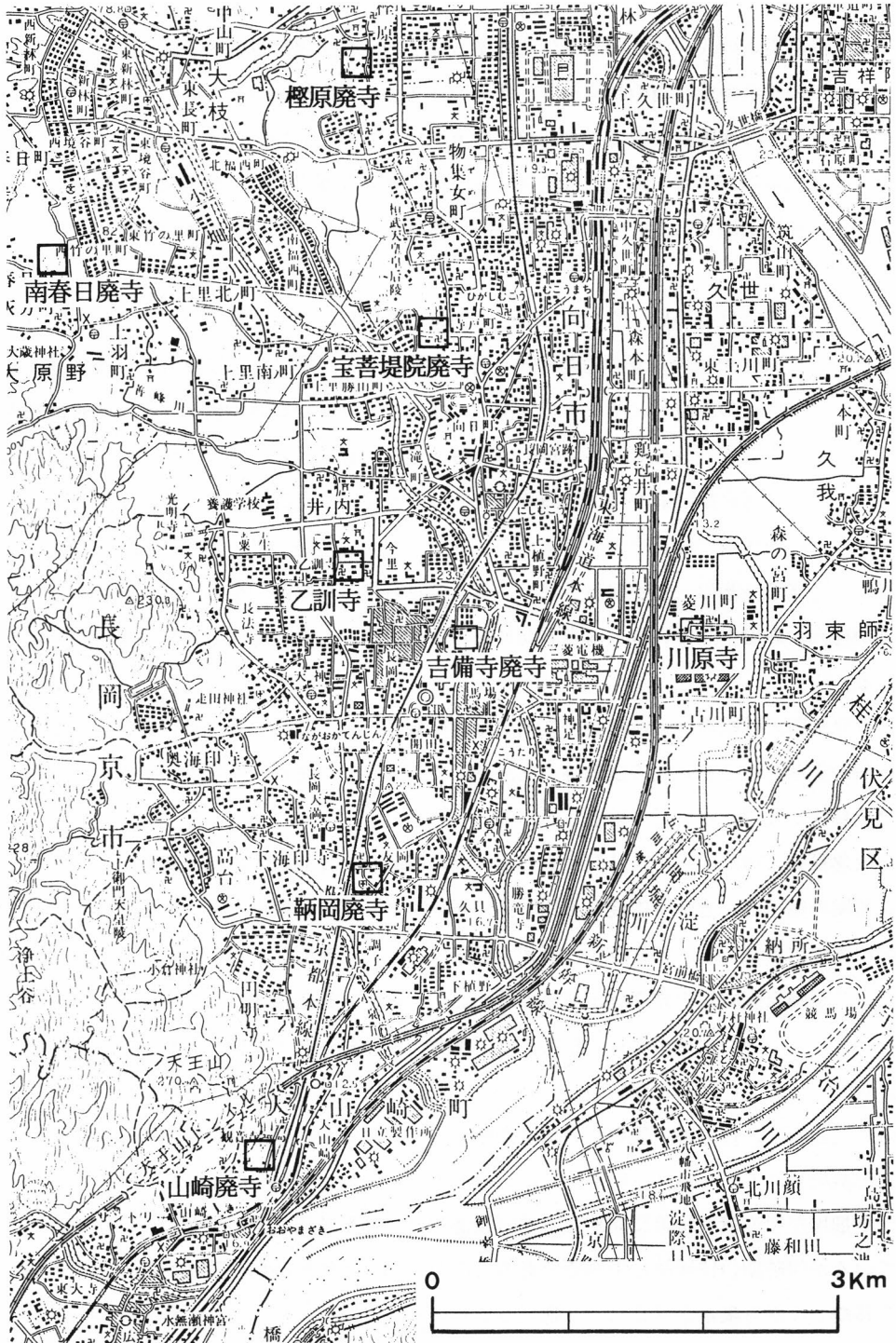
今里遺跡の西南で段丘を覆う扇状地に立地する長法寺遺跡では、弥生時代後期前葉を中心とした環濠集落の一部が検出されている。奈良時代の建物跡が検出され、銅製の鍔帯金具が柱穴から出土している。南東方向にある東代遺跡でも奈良時代の建物跡が検出されている。

阪急長岡天神駅周辺の段丘面に立地する開田城ノ内遺跡では、弥生時代後期～古墳時代後期の集落跡や奈良時代の建物跡が検出されている。井戸跡から乙訓寺出土の瓦に酷似した飛鳥時代後期の軒丸瓦も出土している。

阪急長岡天神駅からJR長岡京駅のあいだの緩扇状地に立地する開田遺跡では、弥生時代前期の甕棺墓、古墳時代後期の住居跡・建物跡がわずかに検出されている。遺跡の範囲内に塚本古墳がある。奈良時代の明確な遺構はほとんど検出されていない。

JR長岡京駅周辺の標高18m前後の段丘面に立地する神足遺跡は、弥生時代中期～古墳時代にかけての乙訓地域屈指の集落跡で、多数の住居跡やなどが検出され、弥生時代に石器が製作されていたことが判明している。また、住居区域と墓区域の区別がつけられている。飛鳥時代の住居跡・建物跡や土坑が検出されているが、奈良時代の明確な遺構はほとんど検出されていない。平安時代にはいると再び建物跡などが検出されている。

小畑川左岸の緩扇状地に立地する雲宮遺跡では、弥生時代前期の環濠の一部が検出されているが同時期の住居跡は未確認であるものの、弥生時代各時期の遺物が見つかり範囲内を移動しながら集落が営まれたと推定されている。古墳時代後期の住居跡も検出されている。奈良時代の明確な遺構はほとんど検出されていない。



第3図 乙訓郡の古代寺院

付表 乙訓郡の遺跡

遺跡名	弥生時代	古墳時代	飛鳥時代	奈良時代	平安時代
中久世遺跡	住居跡	住居跡		建物跡	建物跡
大藪遺跡	住居跡	溝など		建物跡	
東土川遺跡	住居跡	住居跡		建物跡	
羽束師遺跡	住居跡	住居跡	水田跡	建物跡	建物跡
水垂遺跡		住居跡・水田跡	溝		溝など
中街道遺跡	住居跡	住居跡		建物跡	建物跡
久々相遺跡				建物跡	建物跡
殿長遺跡		住居跡		建物跡	
森本遺跡	住居跡	住居跡			建物跡
石田遺跡	溝など				
鶏冠井遺跡	住居跡・墓	旧河道			
鶏冠井清水遺跡	住居跡	水田跡			
推定乙訓群衙		古墳	土坑	建物跡	
吉備寺遺跡	住居跡	住居跡・墓			
鴨田遺跡	壺棺墓	住居跡			
馬場遺跡		住居跡・墓			
上里遺跡	土坑・溝	墓・溝		溝など	
井ノ内遺跡	住居跡	住居跡	土坑	建物跡	建物跡
今里遺跡	住居跡・墓	住居跡・墓	建物跡	建物跡	建物跡
更ノ町遺跡				建物跡	溝など
長法寺遺跡	住居跡			建物跡	
開田城ノ内遺跡	住居跡	住居跡・墓		建物跡	建物跡
開田遺跡	壺棺墓	住居跡			
神足遺跡	住居跡・墓	住居跡・墓	住居跡・建物跡		建物跡
雲宮遺跡	環濠・墓	住居跡			
伊賀寺遺跡		住居跡		建物跡	建物跡
友岡遺跡		住居跡		建物跡	建物跡
下植野南遺跡	住居跡	住居跡			建物跡
百々遺跡	住居跡	住居跡		建物跡	建物跡

小泉川左岸の段丘面に立地する伊賀寺遺跡では、古墳時代後期の住居跡が検出され、奈良時代の建物跡も検出されている。伊賀寺遺跡北西の下海印寺遺跡でも奈良時代の建物跡が検出されている。

伊賀寺遺跡南東の小泉川左岸の段丘面に立地する友岡遺跡では、奈良時代の建物跡などが検出されている。この遺跡の南部に鞆岡廃寺がある。飛鳥時代～平安時代の瓦をはじめとする多数の遺物が出土しており、建物跡が鞆岡廃寺と関連するものと考えられている。友岡遺跡の南端(大縄遺跡)では、古墳時代後期の住居跡が検出されている。

④大山崎町域の遺跡

小泉川左岸の氾濫源に立地する下植野南遺跡では、弥生時代後期～古墳時代の集落跡で、

奈良時代の建物跡はほとんど検出されていない。その後、長岡京期～平安時代には再び建物群が造られている。

小泉川右岸の段丘面～氾濫源に立地する百々遺跡では、弥生時代後期の住居跡、古墳時代後期の住居跡、奈良時代の建物跡や平安時代の建物跡も検出されている。ここでは、平安時代の西国街道の側溝が検出されている。

阪急山崎駅周辺の推定第四次山城国府跡の調査では、奈良時代の文字瓦などが出土している。また、奈良時代の山崎橋・山崎津もこの付近に想定されている。

3. 遺跡の移動と道

弥生・古墳時代には、向日丘陵沿いの扇状地・段丘上や周辺の平地(氾濫源など)、西山沿いの扇状地・段丘上、神足周辺の低位段丘・緩扇状地、小泉川沿い段丘面～氾濫源に集落が営まれる。それらの遺跡を結ぶ道路が当然存在したと推定できる。遺跡間を結ぶものとして高田遺跡の道路状遺構がある。

京都と大阪を結ぶ南北方向が主要な路線とすると、①平地を通るもの(現在の国道171号線にはほぼ一致)、②低位段丘・緩扇地を通もの(JR東海道線沿いに北上し向日市内から阪急線沿いに北上する)、③西山沿いの段丘面・扇状地を通るのが想定できよう。①と②は近接するためひとつの路線とすることもできる。

遺跡のうちには中断や移転のみられるものがある。向日市域では氾濫源に立地する集落はそのほとんどが災害等のみられないのに古墳時代以降継続しない。その例には、鶏冠井遺跡・鶏冠井清水遺跡・鴨田遺跡などがある。長岡京域では、神足遺跡の集落が奈良時代に中断し、雲宮遺跡が古墳時代以降継続しないと推測できる。また、開田遺跡でも奈良時代に集落が営まれなかったと推測できる。大山崎町域では下植野南遺跡の集落が奈良時代に中断すると推測できる。京都市の水垂遺跡も奈良時代以降の集落は営まれていない。

集落の中断や移転は、生産の場所(水田)と住居を区別した(乾燥した土地に住む)ためとも推測できるが、西山沿いの扇状地・段丘上に奈良時代の集落が集中するのは、住み分け以外の理由が考えられる。

安定した地盤に立地する開田遺跡や神足遺跡(飛鳥時代の建物跡や土坑は検出されている)に奈良時代の集落がみられず、西山沿いに集落が分布するのは当時の交通状況を反映している可能性が高い。「道」の移動によると考えた方がつじつまが合う。

4. おわりに

西山沿いに、南から山崎廃寺－鞆岡廃寺－乙訓寺－南春日廃寺の古代寺院が並んでいる

のも交通状況によると考えると、まだ証明する道路遺構は検出されていないが、この西山沿いこそ「古山陰道」にふさわしい。

足利健亮氏が提唱する長岡京域を斜行する「古山陰道」想定ライン上の、井ノ内・今里遺跡以外では集落が見当たらず(想定ライン上の神足遺跡や付近に集落が見つかってよいのに、それもない)、桂川右岸の低湿地を通るのであまり機能していないものと推測される。また、桂川・宇治川・木津川と三つの河川を横断するより三つの河川が合流する山崎付近で一度に渡河した方が便利ではないだろうか。合流地点に行基が山崎橋を架橋したのもそのためであろう。合流地点に行基が山崎橋を架橋したのは、山陽道のためだけでなく、山陰道もここから分岐していたのではないかと推測できる。

(いしお・まさのぶ=当センター調査第2課調査第3係調査員)

- 注1 山中 章「長岡京跡左京第244次(7ANDKT-2地区)発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第32冊) 1991 (財)向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会。
- 注2 山本輝雄「左京第116次(7ANMKD地区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報・昭和59年度』 1985 (財)長岡京市埋蔵文化財センター、
中島皆夫「左京第235次(7ANLRB-3地区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報・平成元年度』 1991 (財)長岡京市埋蔵文化財センター。
- 注3 奥村清一郎・戸原和人ほか「長岡京跡左京第53次(7ANMSB地区)調査概要」『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』・第14冊) 1985 長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所 ほか。
- 注4 林 亨ほか「長岡京跡右京第69次(7ANSDD地区)発掘調査概要」『大山崎町埋蔵文化財調査報告書・第4集』 1984 大山崎町教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所、
岩松 保「長岡京跡右京第324次・大山崎工区発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報・第47冊』 1992 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、ほか。
- 注5 足利健亮「乙訓郡を通る計画街路としての古山陰道について」(藤岡謙二郎編『洛西ニュータウン地域の歴史地理学的調査』) 1972 京都市。

参考文献

- 『向日市史・上巻』 1983 向日市役所
- 『向日市遺跡地図 [第3版]』 1995 向日市教育委員会
- 『向日市埋蔵文化財調査報告書』第3～第39集 向日市教育委員会・(財)向日市埋蔵文化財センター
- 『(財)向日市埋蔵文化財センター年報・都城』 1～6 (財)向日市埋蔵文化財センター
- 『長岡京市史・資料編』 1991 長岡京市役所
- 『長岡京市遺跡地図』 [第3版] 1992 長岡京市教育委員会
- 『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第3～第32冊 長岡京市教育委員会

『長岡京市埋蔵文化財センター年報』 昭和57年～平成5年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター

『京都府文化財発掘調査報告』 京都府教育委員会

『京都府遺跡調査概報』 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

『大山崎町埋蔵文化財調査概要報告』 大山崎町教育委員会

『京都市内遺跡調査概報』 京都市文化観光局

『京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所

『中久世遺跡発掘調査概報』 京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所

中尾秀正「乙訓地方における奈良時代の集落の検討」(『長岡京古文化論叢』 1986 同朋舎出版)